

サッカーにおける「できる」ための「わかる」を意識した授業づくり ～フラッグサッカーの授業実践を通して～

安井 仁* 戸井有希**
鳥取大学附属中学校 保健体育科
E-mail: * yasui_ht@tottori-u.ac.jp
** ttyoshida@tottori-u.ac.jp

Hitoshi YASUI, Yuki TOI (Tottori University Junior High School) : Proposal for practice in mixed-gender classes – What we have found from hurdling practice.

要旨 — 新学習指導要領では、保健体育科として授業を通し生涯にわたって運動に親しもうとする、運動やスポーツへの愛好的態度の育成に繋げていくことをめざしていくものだが、生徒一人ひとりの運動格差・技術格差が著しいことも現実問題としてあり運動を嫌い、不得意と感じる児童・生徒が存在することも事実である。特に球技は顕著であり、運動に対して苦手意識を持つ生徒も多いと思われる。そこで本校の研究主題『学ぶ力を育む「やりくり」授業の開発』に基づき、安全性と戦術学習に特化したフラッグフットボールの特性を生かした教材開発を目的とし授業実践を行い、運動有能感に及ぼす影響を検討した。結果は授業を通し運動有能感合計に影響を及ぼすことはなく、運動有能感の因子である身体的有能さの認知の得点を有意に下げることとなったが、多くの生徒が楽しく学び、上達も感じられたことやできない運動でもあきらめないうで練習すればできるようになると思うと感じる生徒が有意に高まるなど成果もあった。

キーワード — 運動有能感, サッカー, 安全性, 戦術, 男女共習

Abstract — As a health and physical education department, the new course of study aims to foster a liking attitude toward exercise and sports, which aims to familiarize people with exercise throughout their lives, but there is an exercise gap among each student. It is also a fact that there are children and students who dislike exercise and feel that they are not good at it because of the remarkable technical disparity. Ball games are particularly prominent, and it seems that many students are not good at exercising. Therefore, based on the research theme of our school, "Development of" management classes that foster learning ability," we practiced lessons with the aim of developing teaching materials that make use of the characteristics of flag football, which specializes in safety and tactical learning. The effect on the feeling was examined. The results could not affect the total motor competence throughout the lesson and significantly reduced the cognitive score of physical competence, which is a factor of motor competence, but many students. There were also results such as a significant increase in the number of students who felt that they would be able to learn happily and that they would be able to practice even if they felt that they had improved or could exercise if they try without giving up.

Key words — Exercise competence, soccer, safety, tactics, co-education

1. はじめに

1.1. 問題の所在とねらい

医学の進歩や健康に対する意識の高まりなどにより、日本の平均寿命も男女共に80歳を超える時代となった。厚生労働省の調査によると、平均寿

命の伸び以上に健康寿命が伸びていることが明らかとなり、長い人生をより快適に充実したものにするための健康維持に努めている人が年々増加している。一方、子どもをとりまく環境の変化を背景に、運動の二極化、食や睡眠などの基本的な

生活習慣の乱れ、ストレスの増大等、心と体の健康に関する問題は複雑で多様な課題が顕在している。

このような現状を受け、新学習指導要領では保健体育科として、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」ことを目標としている。これは授業を通し、生涯にわたって運動に親しもうとする、運動やスポーツへの愛好的態度の育成に繋げていくことをめざしていくものだが、近年体を使った遊びが減り、普段から運動する生徒・しない生徒の二極化、また競技歴や経験によって生徒一人ひとりの運動格差・技術格差が著しいことも現実問題としてあり、運動を嫌い、不得意と感じる児童・生徒が存在することも事実である。特に球技は顕著であり、運動に対して苦手意識を持つ生徒も多いと思われる。さらに独立行政法人日本スポーツ振興センターの統計データによると、中学校では体育活動中のバスケットボール、サッカー等の身体接触の多い球技種目での事故も増加しているという報告もある。

そこで本校の研究主題『学ぶ力を育む「やりくり」授業の開発』に基づき、ゴール型球技である「サッカーにおける『できる』ための『わかる』を意識した授業づくり」と題し、安全性と戦術学習に特化したフラッグフットボールの特性を生かした教材開発（*以下フラッグサッカー）を行うことを目的として授業実践を行い、運動有能感に及ぼす影響を検討することとする。また昨年に引き続き、共生社会、生涯スポーツ社会の実現を意識した男女共習授業も取り入れ、運動に対する意識の違いや技能や経験の程度、性別の違いによって運動有能感にどのような変化の違いがあるか調べ、今後の指導につなげたいと考える。

1.2. 生徒の実態

本校の生徒は、何事に対して意欲的に取り組む生徒が多く、落ち着いた雰囲気の中で学習することができている。昨年度から男女共習の種目をいく

つか実施しており、男女の雰囲気も非常によいと感じられる。体育を楽しんでいるときの上位項目は、令和元年度スポーツ庁が実施した全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果とほぼ同様であった。上位の項目は男子が「勝ったとき」、「記録が伸びたとき」、「上手にできたとき」であり、女子は男子と同じ項目に「できなかったことができたとき」の項目が加わったのが楽しいと感じる生徒が多い。事前のアンケートによると男子生徒の60%以上が運動に対して肯定的に捉えており、体育の授業も約85%が楽しい・やや楽しいと感じている。(図1)

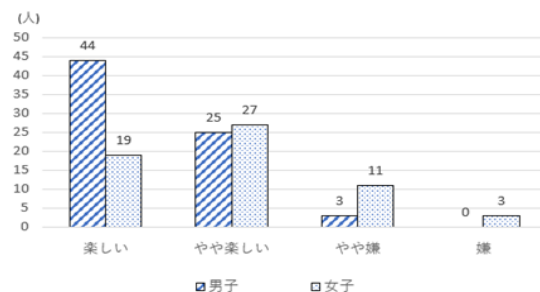


図1 運動の好き・嫌い

新体力テストの結果では男女とも運動能力が高く、全体の65%が評価A・B群でD・E群は15%程度である。女子の方がA・B群が多く、D・E群が少ないが、運動に対する自信はあまりない傾向にある。(図2・3)

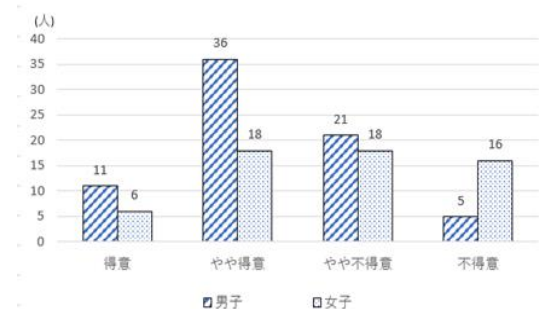


図2 運動の得意・不得意

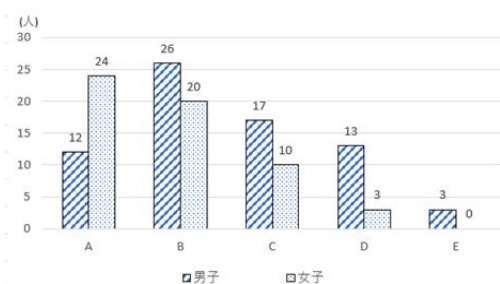


図3 新体力テスト総合結果

小学校の頃にサッカーの経験がまったくない生徒が43名とやや多く、サッカーの共習には技能差・体格差など接触し、転倒ことへの不安を感じる女子がかなり多い。1年時は基本的技能である、パス・ドリブル・ボールキープなどを中心に行ったが、なかなか身につけていないのが現状である。

そこで今年度はウォームアップとして基本的技能であるパス・ドリブル・ボールキープなどを継続して行い、一人ひとりの技能向上を図るとともに、第2学年の「ボール操作と空間に走りこむなどの動きによってゴール前での攻防を展開できるようにする」という目標達成のため、フラッグサッカーでの“戦術学習”を学びながら安全に活動し、運動有能感を高める授業実践にしたいと考える。

2. 先行研究の検討

2.1 運動有能感とは

運動有能感とは、岡澤ら(1996)によって作成された運動有能感測定尺度(図1)を用いて測ることができ、得点が高い方がより運動有能感が高いと捉える。岡澤ら(1996)は、運動場面における自信として、「運動有能感」を提唱しており、この目標を実現するためには、生徒が自ら運動に参加したいという思いを高めること、つまり運動に対する内発的動機づけを高めることが必要不可欠であり、す

表1 運動有能感の3因子

運動有能感について	
下位尺度	質問項目
「身体的有能さの認知」 (自分は運動が上手にできるという自信)	1. 運動能力がすぐれていると思います 2. たいていの運動は上手にできます 3. 運動の上手な見本として、よく選ばれます 10. 運動について自信をもっている方です
「統制感」 (努力や練習をすればできるようになるという自信)	3. 練習をすれば、必ず技術は伸びると思います 4. 努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思います 11. 少し難しい運動でも、努力すればできると思います 12. できない運動でも、あきらめずに練習すればできるようになります
「受容感」 (教師や学習仲間から受け入れられているという自信)	5. 運動をしているとき、先生が励ましてくれたり応援してくれます 6. 運動をしているとき、友だちが励ましてくれたり応援してくれます 7. 一緒に運動しようと誘ってくれる友だちがいます 9. 一緒に運動する友だちがいます

なわち自信を高めることが内発的動機づけを高めると示している。また岡澤・三上(1998)は運動に対する内発的動機づけと運動有能感には正の相関関係があることを明確にしている。「身体的有能さの認知」(自分は運動が上手にできるという自信)・「統制感」(努力や練習をすればできるようになるという自信)・「受容感」(教師や学習仲間から受け入れられているという自信)の3因子から構成されている(表1)。

先行研究において、運動有能感を高めることが運動に対する内発的動機づけを高めること(岡澤・三上;1998)や、運動に対する愛好度を高めること(岡澤・仲田;1998)が明らかになっている。体育授業では、運動有能感を高めるという視点で授業づくりを行うことが、生涯体育・スポーツの実践者育成につながると考えられる。

2.2. フラッグフットボールとは

フラッグフットボールとは、アメリカンフットボールのタックルを禁止し、代わりに腰に付けたフラッグ(旗)を取ることに置き換えた安全性の高いゴール型の球技である。フラッグフットボールはボールを持って走るため難しい技術は必要なく、また攻撃も4回できるためその都度作戦を立てそれぞれの役割行動を決定できる。すなわち戦術学習に特化したゴール型球技と言える。2000年以降、新しい体育教材として普及され始め、小学校では5000校以上の授業実践が行われており教育的価値は既に認められているといえる。小学生を対象にしたフラッグフットボールの授業実践(小畑・岡澤・石川;2007)では有効な結果を報告している研究もある。

2.3. 教材観(サッカー)について

サッカーは攻守が激しく入れ替わるゴール型のスポーツである。中学校では、基本的な技能や仲間との連携した動きを発展させ、作戦に応じた技能で仲間と連携しゲームが展開できるようにすることが求められ、第1学年及び第2学年の「ボール操作と空間に走りこむなどの動きによってゴール前での攻防を展開できるようにする」ことをねらいとした学習を受けて第3学年においては、仲間と

連携してゴール前の空間を使ったり、空間を作りだしたりして攻防を展開できるようにすることをねらいとしている。

サッカーは、手以外の体の部位でボールを扱わなければならないため、経験の少ない生徒にとって非常に難しいスポーツであり、他の球技に比べ、技能の習得には時間が必要となる。また球技の中では、得点の入る場面が生じにくく、パスやドリブルでゴールするまでの複数の連携プレーによる動きと判断力が必要となる。小林(1986)、石川ほか(2001)の研究によると、小学校の体育領域ではボール運動ゴール型の「サッカー」が上手い子との能力差が大きいことや、一部の技能の高い子のみによりゲームが進められることなどの理由から、運動が苦手・嫌いな子にとっては特に辛い種目であることがこれまで指摘されてきた。

それゆえ自らの課題を克服し、得点を入れた時の喜びは大きく、楽しみの要素となる。またサッカーはチームスポーツという特性から個人技能だけでなく、集団技能を高めることがゲームの内容を充実させる大きな要素と言える。実際のゲームではボールを持たない時間帯が圧倒的に長く、その時間にどのような動きをすればいいのかを理解、判断し、試合中に必要な集団技能を効果的に発揮できるよう工夫することも楽しさの一つであると考えられる。後藤・松本(2001)によるとサッカーを楽しんでいる児童は、楽しめていないとする児童よりも作戦を立てている傾向のあることが報告されている。したがって「戦術」を理解することは、ボールゲームを上手に行うことができるための基本的条件になると考えられる。近年、ボールゲームの体育授業において戦術学習の重要性が叫ばれるようになったのもこのためである。



図4 フラッグサッカーの様子

3. 研究方法

3.1. 対象・方法

鳥取大学附属中学校第2学年4クラス(男子75名・女子61名)2クラスずつ男女共習で授業実践を行った。

単元前後に質問紙調査と岡澤ら(1992)によって作成された運動有能感測定尺度(3因子各4項目、全12項目)を用いて運動有能感を測定し、js-STARでt検定を行った。

戦術についての理解度は後藤ら(2000)の戦術行動認識度テストの一部を実施した。

3.2. 時期

令和2年10月中旬から11月中旬にかけての全11時間。

表2 単元計画

指導計画(全11時間)		
時間	内 容	
1	オリエンテーション	事前アンケート(運動有能感測定)
2	基礎練習①	
3	基礎練習②	ウォームアップ・ドリル
4	基礎練習③・フラッグフットボール説明(体育館にて)&デモンストレーション	
5	フラッグフットボール試合A・C組	チーム練習B・D組
6	フラッグフットボール試合B・D組	チーム練習A・C組
7	フラッグサッカー説明	
8	フラッグサッカー(同クラスと実施)	半分はリフティング練習
9	フラッグサッカー(他クラスと実施)	半分はリフティング実技テスト
10	実技テスト(パスシュート)	
11	5対3サッカー攻守ミニゲーム(他クラスも含め3チーム)	形成的授業評価4 事後アンケート(運動有能感測定)

4. フラッグサッカーの実践

本単元の目標は「戦術を理解し、簡単な作戦を立てゴールまで展開できるようにする」ことに設定し、実践を行った。チーム力になるべく均等になるように男女混合で分け、単元の前半は必要最小限の技能の習得をめざしウォームアップドリルとして、パスやドリブル、ボールキープなどチームで教



図5 実際に使用した作戦ボード

え合いながら行った。その後、フ
ラッグフットボールで動きの確認
やパスからのシュートなど少しづ
つ実戦に近づけていき、中盤か
ら後半にかけフラッグフットボ
ールの特性を生かしたルールをサ
ッカーに置き換え、安全性を確
保しつつ戦術(動き方)学習を行
った。また作戦ボード(図5)を活
用することで仲間との関わりが
生まれやすくなり、課題解決を図る学習を展開
することができる。そうすることで自分のすべき動き
が明確となり、自分に合った課題を見つけ運動に
積極的に参加したり、親しんだりする資質や能力
が身につくと考え実践した。

主なルールは下記の通りである。

- 1チーム6~7名
 ※男子3~4名 女子2~3名
 ・ボールは1個、ゴールは2個使用する。 ※ゴ
ールはハードルとし、ゴール手前4メートルは
攻撃・守備進入禁止エリアとする。
 ・攻撃5名、守備3名 ※必ず男女混合とな
るよう編成すること。
 ・攻撃側は腰の横にフラッグ(ビブス)を着用す
る。 ※両側
 ・1回のプレイごとにメンバーは交代すること。
攻撃は5回とする。攻撃の前には1回ごとに
作戦の確認タイムをとる。 ※作戦ボードの活用
 ・攻撃側は、パスやドリブルでゴールをめざす。
5回以内の攻撃でゴールを決めれば1点とな
る。守備側はフラッグを取るか、ボールを奪い
守備側が2回続けてボールにタッチした場
合、攻撃側は取られた場所からリスタートす
る。
 ・最初のワンプレイではリスタート地点より後方
に攻撃側は移動できるが守備側はできないこ
ととする。
 ・守備側は、攻撃側の選手に触れないことを原
則とする。(バスケットボールのルール)
守備側が反則した場合もその場からリスタート
となるが、攻撃回数は減らない。
 ・ボールを守備側に奪われたら、1回の攻撃は
終了となる。
 ・審判は守備側、攻撃側から1名ずつ計2名
で行い、プレイごとに交代する。

表5 運動有能感3因子

	群	N	事前		事後		差	t検定
			MEAN (SD)	MEAN (SD)	MEAN (SD)	MEAN (SD)		
身体的有能さの認知 (20)	全体	131	10.35 (4.26)	9.81 (4.09)	-0.54	t(130)= 2.6773, ** (p<.01)		
	男	73	11.19 (4.21)	10.30 (4.04)	-0.89	t(72)= 2.7562, ** (p<.01)		
	女	58	9.29 (4.08)	9.10 (4.05)	-0.19	t(57)= 0.7066, ns (.10<p)		
統制感 (20)	全体	131	15.92 (3.59)	16.17 (3.54)	0.25	t(130)= 0.9464, ns (.10<p)		
	男	73	16.81 (2.95)	16.64 (3.08)	-0.17	t(72)= 0.6623, ns (.10<p)		
	女	58	14.81 (3.99)	15.50 (3.96)	0.69	t(57)= 1.754, + (.05<p<.10)		
受容感 (20)	全体	131	16.07 (3.13)	16.28 (3.01)	0.21	t(130)= 1.0226, ns (.10<p)		
	男	73	16.53 (2.49)	16.42 (2.72)	-0.11	t(72)= 0.4644, ns (.10<p)		
	女	58	15.48 (3.71)	16.07 (3.33)	0.59	t(57)= 1.8483, + (.05<p<.10)		
運動有能感合計 (60)	全体	131	42.34 (9.30)	42.18 (8.68)	-0.16	t(130)= 0.3956, ns (.10<p)		
	男	73	44.53 (7.89)	43.37 (7.77)	-1.16	t(72)= 2.1168, * (p<.05)		
	女	58	39.59 (10.16)	40.67 (9.49)	1.08	t(57)= 1.6692, ns (.10<p)		

5. 結果と考察

サッカーにおけるフラッグサッカーが運動有能
感に与えた影響を検討するため、単元前・単元後
の計2回測定した運動有能感を全体・男子・女子
の3群に分け、「身体的有能さの認知」、「統制
感」、「受容感」、「運動有能感合計」の4因子に分
類し、それぞれ t 検定によって分析を行った。(表
5) また、各質問項目についても同様に分析し、
有意差が見られた項目のみ男女別に分析を行っ
た。(表6)

5.1 「身体的有能さ」の変容

身体的有能さの変容について結果は、男子
(11.19→10.30)、女子(9.29→9.10)、全体(10.35
→9.81)と全ての群においてポイントが減少した。
特に男子は-0.89ポイントと有意な減少が見られ
た。

質問項目別に見ると、質問項目2・8・10は有意
差は見られず、質問項目1の「運動能力がすぐれ
ていると思う」に対して有意に減少している。

自分は運動を上手にできるという自信がなくな
ったということになるが、その要因としてサッカー経
験が乏しい生徒が多く、なんとなくパスやドリブル
ができるだけで、サッカーができるのではないかと
感じていた生徒が、実際にゴールをめざしながら、
周りの状況を判断し、パスやドリブルを行うことの
難しさを体験したためと考えられる。その傾向は
男子が強く、大幅な減少につながったのではない
かと考えられる。

5.2 「統制感」の変容

統制感の変容について結果は、男子(16.81→

表 6 運動有能感 項目ごとの変容

質問項目	群	事前	事後	差	t検定
		MEAN (SD)	MEAN (SD)		
1 運動能力がすぐれていると思います	全体	2.82 (1.22)	2.60 (1.18)	-0.21	t(130)= 2.8848 . ** (p<.01)
	男	3.04 (1.20)	2.75 (1.19)	-0.29	t(72)= 2.5633 . * (p<.05)
	女	2.53 (1.19)	2.41 (1.15)	-0.12	t(57)= 1.4613 . ns (.10<p)
2 たいていの運動は上手にできます	全体	2.86 (1.14)	2.73 (1.15)	-0.14	t(130)= 1.8779 . + (.05<p<.10)
8 運動の上手な見本として、よく選ばれます	全体	1.93 (1.1)	1.80 (1.03)	-0.13	t(130)= 1.8299 . + (.05<p<.10)
10 運動について自信を持っている方です	全体	2.80 (1.32)	2.64 (1.24)	-0.16	t(130)= 1.9003 . + (.05<p<.10)
3 練習をすれば、必ず技術は伸びると思います	全体	4.13 (0.99)	4.12 (1.02)	-0.01	t(130)= 0.1296 . ns (.10<p)
4 努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思います	全体	3.90 (1.04)	3.92 (1.04)	0.02	t(130)= 0.2591 . ns (.10<p)
11 少し難しい運動でも、努力すればできると思います	全体	3.92 (0.99)	3.90 (1.02)	-0.02	t(130)= 0.2375 . ns (.10<p)
12 できない運動でも、あきらめないうで練習すればできるようになると思います	全体	3.97 (0.1)	4.19 (0.94)	0.22	t(130)= 2.9167 . ** (p<.01)
	男	4.16 (0.91)	4.26 (0.89)	0.10	t(72)= 1.3686 . ns (.10<p)
	女	3.72 (1.05)	4.10 (0.99)	0.38	t(57)= 2.7065 . ** (p<.01)
5 運動をしているとき、先生が励ましてくれたり応援してくれます	全体	3.84 (0.86)	3.92 (0.74)	0.08	t(130)= 1.2669 . ns (.10<p)
6 運動をしているとき、友だちが励ましてくれたり応援してくれます	全体	4.12 (0.84)	4.21 (0.76)	0.09	t(130)= 1.2216 . ns (.10<p)
7 一緒に運動しようと誘ってくれる友だちがいます	全体	4.01 (1.1)	3.97 (1.17)	-0.04	t(130)= 0.4702 . ns (.10<p)
9 一緒に運動する友だちがいます	全体	4.16 (1.1)	4.16 (1.13)	0.00	t(130)= 0 . ns (.10<p)

16.64)は減少したが、女子(14.81→15.50)が有意差は見られなかったものの増加しており、この影響で全体(15.92→16.17)も微増した。

質問項目別に見ると、質問項目 3・4・11 は有意差は見られず、質問項目 12 の「できない運動でも、あきらめないうで練習すればできるようになると思う」に対して有意に増加している。特に女子の得点が有意に増加している。

努力や練習をすればできるようになるという自信は、男子は変化なく、女子は増加傾向であった。

その要因として考えられることは男女間で「できる」のレベルに相違があるということである。本単元の目標は「戦術を理解し、簡単な作戦を立てゴールまで展開できるようにする」ことであったにも関わらず、女子の多くは基本技能すらままならない状態からのスタートであり、パスやドリブルなどが多少できるようになったことや全く動けなかったがチームで動きを確認することで動けたというふうに統制感が強まったと考えることもできる。またフライングサッカーという特別ルールの設定も女子にとってはプラスに作用したと考えられる。個々の振り返りを見ても、女子の多くは男子からフライングを奪えたことが印象に残っていたようである。特に技能がなくてもフライングを取るという動作でチームに貢献できたことも一要因と考えられる。

5.3 「受容感」の変容

受容感の変容について結果は、男子(16.53→16.42)はやや減少したが、女子(15.48→16.07)が

有意差は見られなかったものの 0.59 ポイント増加しており、この影響で全体(16.07→16.28)も増加した。質問項目別に見てもすべての項目に有意な差は認められなかった。

受容感、単元前からすでに 3 因子の中で最もポイントが高い。その理由として、昨年度から継続的に男女共習で授業を実施していたことも影響しているのではないかと思われる。個々の練習やチーム練習、フライングサッカーにおいて必ず男女混合で取り組んでいた成果である。また体育だけでなく、他教科の取り組みや普段の学級経営の影響も非常に大きいと言える。



図 6 作戦ボードを活用した話し合いの場面

5.4 「運動有能感合計」の変容

運動有能感合計の結果は、女子平均が 1.08 ポイント微増(39.59→40.67)したが、全体は 0.16 ポイント微減(42.34→42.18)している。これは男子の結果(44.53→43.37)が有意な減少が見られたためである。先述したように男子の身体的有能さ有意な減少が見られ、全体にも影響することになった。

5.5 質問紙調査の結果

授業としてのサッカーは楽しく学べましたか？という問いに対して、楽しかった・やや楽しかったと答えた生徒は全体の 95%であった。(図 7)

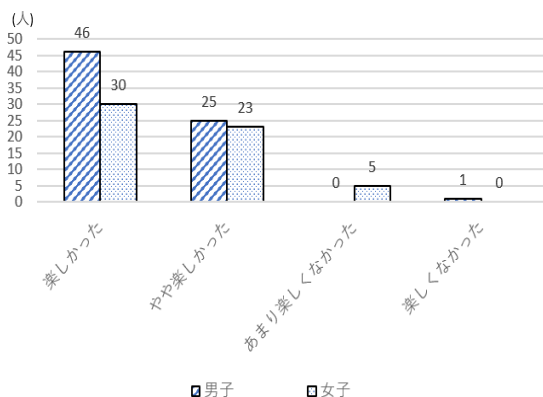


図 7 授業としてのサッカーについて

運動有能感の合計ポイントが微減していたにも関わらずこの結果は意外ではあったが、サッカーの難しさを感じつつ、仲間とともにできない自分と向き合い、前向きな気持ちで取り組んでいたと言える。

サッカーに対してどのように感じていますか？という問いに対して、上達した・やや上達したと答えた生徒は全体の 82%であった。(図 8)

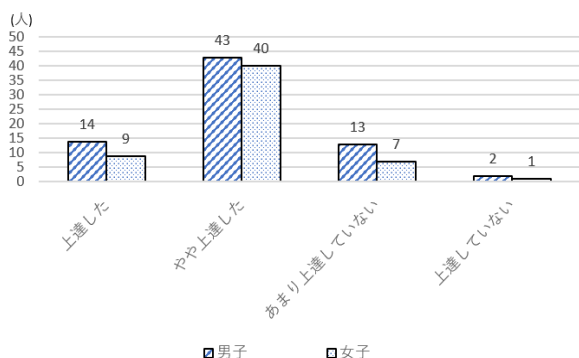


図 8 サッカーの上達について

運動有能感の身体的有能さの認知のポイントは減少したが、自分なりに上達を感じていたようである。統制感のポイント増加要因と同様に、単元目標には届かなかったと感じていても、基本技

能は上達したり、実際に動けなくても戦術は理解できたりしているからだと考えられる。

戦術についても、図 9 の場合にどう動くかを問うと 102 名の生徒は動き方を理解し、そのうち 66 名の生徒が実際に動くことができると考えている。動き方もわからないし、実際に動けない生徒は 4 名でいずれも女子生徒であった。(図 10)

図 9 の戦術行動認識度テストもほとんどの生徒が正答しており、図 10 のように理解度も高い。しかし実際にグラウンドでプレイしている生徒の活動の様子を見ると、若干のズレを感じる。平面で動きを考えることと実際の動きのズレをいかに修正できるかが今後の課題と言える。

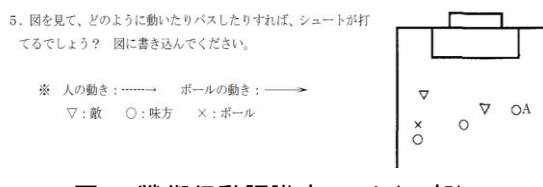


図 9 戦術行動認識度テスト(一部)

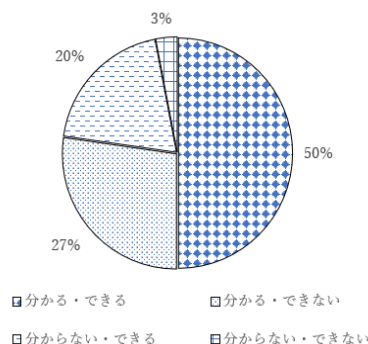


図 10 戦術についての理解

図 11 は体育をしていて楽しいと感じるときを単元前後で比較したものである。「教えてもらってわかった」が大幅に増加している。その他図の右側の項目も数名ではあるが増加している。この結果は運動有能感の受容感とも関わりがあると考える。

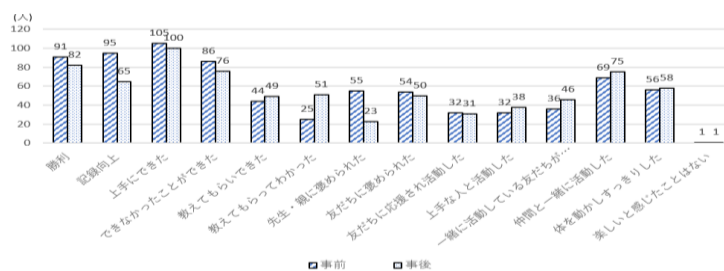


図 11 体育を楽しいと感じるとき 事前・事後の比較 (複数回答)

6. おわりに

本実践報告は、鳥取大学附属中学校第2学年対象にしたゴール型球技サッカーの体育授業で、安全性と戦術学習に特化したフラッグフットボールの特性を生かした教材開発を目的とし授業実践を行い、運動有能感にどのような影響を及ぼすかを検討した。結果は単元前よりも運動有能感合計ポイントは低下していた。その要因として身体的有能さの認知(自分は運動を上手にできるという自信)が大幅に下がったことが挙げられる。特に男子生徒が顕著であった。その他の項目については多少のポイントの増減はあったものの有意な差は認められなかった。結果フラッグサッカーは運動有能感に影響を与えることはできなかったと言える。

しかし、女子生徒の受容感には有意な差こそ認められなかったが、プラスの影響を与えていると思われる、運動が苦手な生徒にとっては「できる」ための「わかる」授業になったのではないか。また単元後の質問紙の結果やワークシート、授業の様子から考察すると、サッカーの難しさを感じながらも仲間と協力し、あきらめず取り組み続けることができたと考えられる。今回のフラッグフットボールやフラッグサッカーを各学年の目標に応じて系統的に実施していくことで運動有能感にもプラスに影響を及ぼすことに期待したい。

今回の取り組みは、今後さらに学校現場に期待されるだろう生涯スポーツへつなげるという視点に立てば有効な実践であった。「できる」ための



図 12 教え合いの様子

「わかる」を意識した授業づくりを通し、運動の難しさだけでなく、楽しさや喜び、仲間の大切さを感じることのできる授業をめざし、今後も検討を重ねていきたい。

引用・文献

- 文部科学省(2017)中学校学習指導要領解説 保健体育編. 文部科学省
令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書. スポーツ庁
フラッグフットボールレポート(2016)ー学習指導要領解説への例示掲載から5年フラッグフットボールの今ー. 公益財団法人日本フラッグフットボール協会
小畑治・岡澤祥訓・石川元美(2007)運動有能感を高める体育授業に関する研一フラッグフットボールの授業実践からー. 奈良教育大学付属小学校教育実践総合センター研究紀要 6 巻, pp123-130.
岡澤祥訓・三上憲孝(1996)『体育・スポーツにおける「内発的動機づけ」と「運動有能感」との関係』. 体育科教育 46(10), pp47-49.
岡澤祥訓・辰巳善之(1999)運動有能感を高めるセストボールの授業実践. 体育科教育 47, pp46-49.
後藤幸弘・松本靖(2001)サッカーにおける楽しさと戦術行動に関わる能力の関係ー児童の意識調査とゲームの様相の実態からー. 兵庫教育大学研究紀要 生活・健康系教育 21, pp41-52.
吉松浩(2006)スポーツ教育モデルによるフラッグフットボールの実践ー運動有能感を分析してー. 体育授業研究(9), pp93-101.
高瀬淳也・石田譲(2008)体育授業を通して運動有能感を高める事例研究. 北海道教育大学釧路研究紀要第40号, pp151-155.